文化学園服飾博物館だより

第７号 1994.4.1

テープカット　左よりモネム・パレスチナ常駐総代表、カワール女史、カスラウィ・駐日ヨルダン大使、大沼淳文化学園理事長・博物館館長

『井伊家伝来能装束展』「翁」の展示

『パレスチナとヨルダンの民族衣装展』ヨルダンの衣装の展示

『井伊家伝来能装束展』能面と装束の取合わせの展示

◇文化学園創立70周年記念特別展をふりかえって◇

平成５年、文化学園は創立70周年を迎え、これを記念して服飾博物館では『パレスチナとヨルダンの民族衣装展』と『井伊家伝来能装束展』の二つの特別展を相次いで開催いたしました。

伝統文化存続の危機感からウィダード・カワール女史が生涯をかけて収集したパレスチナの民族資料の質的高さと、学術上の成果をふまえた丁寧な展示は、多くの人々から高く評価されました。展示終了間際の９月には、はからずもパレスチナ暫定自治協定調印のニュースがもたらされました。国際間の相互理解のためには、人々が何を求めいかに暮らしてきたかをお互いに深く知ることが大切ではないかと思われ、博物館ではこの展示をきっかけに、これまであまり知られることの少なかったアラブ諸国の服飾文化の研究を推し進めたいと考えております。

一説によれば、江戸幕府は各藩の軍備拡張を押さえるために、能楽を幕府の式楽とし、大名に競わせ絢爛豪華な能装束を作らせたと言われております。能装束は平和のあかしでもあったわけですが、今回の展示では能装束の美しさや文化的意義を十分伝えることができたと思われます。展示中、畳紙や墨書から博物館所蔵の井伊家伝来能装束の一部には前田家旧蔵のものが含まれていることが判明いたしました。

'93年度活動報告

◇展　　示◇

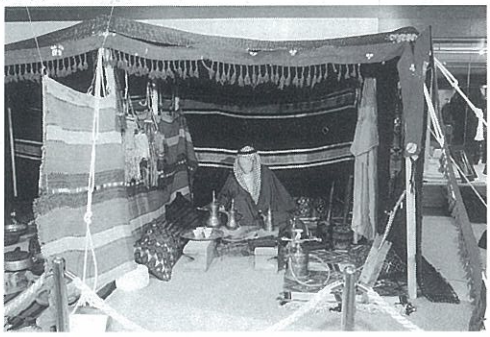
【服飾の世界】 3月10日～5月21日

館蔵の服飾を地域別に幅広く紹介。日本は武家の陣羽織、火事装束、公家装束の伝統を受け継ぐ衣冠、袿袴、また江戸時代後期から明治時代の小袖、髪飾、袋物など、西洋は18世紀後期から1920年代までの時代の流れを代表するドレスで構成しました。アジア、その他の地域は新収資料を中心とし、ナイジェリアのハウサ族の長大な外衣、現地収集したタイの少数民族の服飾などを展示しました。

西洋のドレスの展示

【特別展　パレスチナとヨルダンの民族衣装】 6月10日～9月17日

上質な絹や亜麻地に丹精を込めた刺繍、地域ごとに異なる模様やカッティングを見せるパレスチナとヨルダンの民族衣装を余すところ無く紹介しました。陳列ケースに入れない露出展示を多くし、より見やすく親しみやすい展示を心掛けました。また、ヨルダンの展示室にはベドウィンのテントが再現され、実物大のラクダと共に人気を集めました。オープニングはこのコレクションを収集したカワール女史を招待して、アラブ各国の大使の列席のもと盛大に行われました。



展示室に再現されたベドウィンのテント

【特別展　井伊家伝来能装束】 10月15日～11月22日

「染織工芸」と「演目と装束の取合わせ」の二つのテーマを設けて展示しました。なかでも喜多流宗家十六世・喜多六平太先生監修のもと、実際にマネキンに装束を着付けた「翁」をはじめとして、演目のあらすじ、装束、能面を同時に紹介した展示は、普段能に接する機会のない学生にも能に造詣が深い方々からも、わかりやすく楽しい展示と評価され、画一化しがちな能装束の展示に新たな展開を見せることができました。喜多先生の講演会も会場一杯の聴講者でうまり大変好評でした。

喜多先生講演会「能装束・組み合わせの魅力」と題して

【第8回旧ソ連邦民族衣装展　バシキール共和国の民族衣装】 12月16日～'94年1月18日

ウラル山脈の南端に位置するバシキール共和国は多くの民族で形成されています。その中からバシキール人、タタール人、ロシア人、チュバシ人、マリ人、モルダビア人の民族衣装を共和国から借用し展示しました。各民族の衣装は、19～20世紀の伝統的衣装を共和国の工場で複製したものでしたが、当時の衣装の素晴らしさを彷彿させ、来館者の目を引きました。また、閣僚会議第一副首相を始めとする４名の共和国代表団を招待し、交流を深めました。

左からバシキール(2)、タタール、チュバシ人の衣装

◇収　　集◇

主な収集品は次のとおりです。日本では、財閥の一つであった三井家より、本家（北三井家）の方々が着用された服飾が寄贈されました。主な寄贈品は10代高棟（たかみね）夫人苞（もと）子の明治時代の着物、11代高公（たかきみ）夫人銀（としこ）子の大正時代から昭和初期の着物とドレス、高公夫妻の子供達の着物などです。また、江戸時代後期の小袖３領も同時に寄贈されました。西洋では1860年代から1900年代にかけてのエンパイア、クリノリン、バスル、アール・ヌーボーなど各スタイルのドレス、1950年代のディオール、1960年代のバレンシアガのドレスなどを収集しました。アジアその他の地域では、『パレスチナとヨルダンの民族衣装』展を機会に、'91年の収集品を補う形で貴重なドレスや装身具、さらに生活用具も含めたベドウィンのテント一式を収集しました。また、収蔵資料の少ない西アジアのシリアとイエメン、中央アジアのウズベクとトルクメン、中米メキシコの衣装を収集しました。

1890年代のドレス

寄贈者および寄贈資料は次のとおりです。収集にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。
[illegible]：海軍大佐正装、[illegible]：長着・羽織・袴・印半纏用布・他、[illegible]：長着・他、[illegible]：コート・ワンピース・帯地、[illegible]：長着・羽織・帯・他、[illegible]：ラトビアの民族衣装、[illegible]：団扇・団扇絵・他、[illegible]：ブータン民族衣装・他、[illegible]：長着・帯・他、[illegible]：長着・羽織・帯、[illegible]：錦絵・他、[illegible]：芭蕉布着物・染型紙・苗族民族衣装、[illegible]：コルセット、[illegible]：長着・帯・モーニング・他、[illegible]：ブータン民族衣装、[illegible]：アルタイ共和国の民族衣装、バシキール共和国の民族衣装、[illegible]：小袖・ドレス・他
（敬称は略させていただきました）

◇運営委員・専門委員紹介◇

服飾博物館の新しい運営委員並びに専門委員が下記のとおり任命されました。

運営委員：石川昌宏（文化学園本部総務部長）　濱田勝宏（文化女子大学教務部副部長・教授　服装社会学）　伊賀憲子（文化女子大学助教授　服装社会学）　広川妙子（文化女子大学助教授　被服構成学）　笠井フジノ（文化服装学院教授）　佐々木住江（文化服装学院教授）　小野　坦（文化服装学院学務部連鎖校すみれ会学友会担当副部長）　小林孝男（文化出版局企画調査部長・宣伝課長）

専門委員：佐藤泰子（文化女子大学教授　服装史学）　能沢慧子（文化女子大学助教授　服装史学）　辻ますみ（文化女子大学教授　服装史学）　香取忠彦（文化女子大学教授　造形学）　中村佑三（文化服装学院教授　西洋服装史）　石井雅子（文化服装学院専任講師　西洋服装史）

今後はさらに充実して、21世紀には国際化に伴う情報発信基地として親しまれ研究の場として機能できるようにと期待をこめた新委員の意見がありました。前委員の皆様の尽力に感謝いたします。

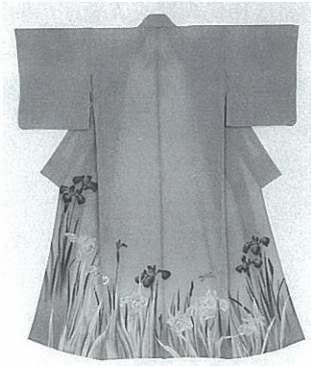
◇学芸員課程と博物館◇

文化女子大学には、学芸員資格取得のために学芸員課程が設けられており、毎年100人以上もの履修生が服飾博物館で実習し単位を取得しています。そのため博物館では毎日２人ずつ、展示替えの時は４人程の実習が行われています。充実した博物館があればこそこれだけの人数の実習が可能といえるでしょう。展示の撤収や準備、資料の保存・整理、資料の撮影、写真や台帳カードの整理から、広報関係の看板作りにいたるまで、根気のいる仕事や丁寧さが要求される仕事さらに力仕事まで、どの実習生ももくもくと取り組んでいます。生真面目な文化女子大生の長所がよく活かされ、手作り博物館をモットーとする服飾博物館の裏方として大きな力となっています。実習生は展示ごとに見学レポートが課せられ、学芸員としての視点から見た展示批評を提出し、服飾博物館ではそれらをもとに展示や設備の改善を積み重ねてきました。実習生からは、自分たちの声が届く反応の速さに驚くとともに、回を重ねるごとに展示の質が高まるので次回が楽しみとの声が多く寄せられています。

'94年度展示案内

【服飾の世界】 3月9日～4月28日

館蔵品の中から服飾に関する優品を地域別に紹介し、世界の服飾文化の広がりを見せます。「日本」は武家服飾と江戸時代後期から明治時代の小袖、「西洋」は19～20世紀にかけてのドレスと服飾品、「アジア・中米」は中国、韓国、インドネシア、インド、メキシコの民族衣装などを展示。



着物　大正時代（三井家旧蔵）

【名家の装い】 5月20日～6月22日

江戸時代に呉服商と両替商を営んで豪商と称され、明治時代には財閥を形成した三井家の本家（北三井家）から昨年新たに寄贈された服飾品を中心に紹介します。10代高棟夫人苞子（たかみねもとこ）の明治時代の着物とその下絵、袿袴、11代高公夫人鋹子（たかきみとしこ）の大正時代から昭和初期の着物、ドレスなど。

【永遠のリカちゃん】 7月13日～10日7日（8月7日～8月16日は休館）

リカちゃん人形は、1967年の誕生以来ずっと少女たちの夢を形にして来ました。流行のファッション、ウェディング・ドレスから民族衣装までを着こなすファッション・ドールとしてのリカちゃんと、リカちゃんハウスに象徴される暮らし、父親はフランス人母親は日本人でデザイナーに始まる家族構成、様々な面で時代と大人の社会を写しながらファッショナブルであり続けるリカちゃんの世界を服飾資料とともに紹介します。

リカちゃん（© TAKARA 1994）

【紋織りの世界】 10月26日～11月30日

1992年の特別展『刺繍の世界』に次ぐ染織シリーズの２回目として『紋織りの世界』を取り上げます。金銀糸や様々な色糸を駆使し、経糸と緯糸を複雑に交差させて作る紋織物は、最も高度な織物技術を必要とし、織物の王者ともいうべき風格をそなえています。日本の正倉院の染織、有職の織物、能装束の織物などと、インド、ペルシア、イタリア、フランス、イギリスなどの紋織物の歴史をたどります。

【第9回　旧ソ連邦民族衣装】 '95年1月9日～2月17日

「旧ソ連邦民族衣装」は1986年より毎年開催されているもので、これまでに極東地方、バルト三国、ヤクート、ブリヤート、ウクライナ、トルクメン、アルタイ、バシキールの各共和国の民族衣装を紹介してきました。今回は９回目となりますが、取り上げる共和国については未定です。

利　用　案　内

［開館時間］ 平日：午前10時～午後４時30分／土曜日：午前10時～午後３時（入館は閉館の30分前まで）

［休 館 日］ 日曜日・祝日・年末年始・夏期休暇／学園の創立記念日（６月23日）／展示替の期間

［入 館 料］ 一般300円・学生200円（20名以上の団体は一般200円・学生150円）　特別展は別料金

※文化学園の職員・学生、及び職員が同伴する方は無料

文化学園服飾博物館だより　第7号

編集・発行　文化学園服飾博物館
〒151 東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL.03-3299-2387

学校法人文化学園　文化女子大学・文化服装学院・文化外国語専門学校・文化出版局・文化事業局